

道心



禅昌寺通信「道心」第41号

編集 日光山禅昌寺「道心」編集室

発行 平成24年1月1日

〒732-0002 広島市東区戸坂山根 3-2-7

TEL 082-229-0618 FAX 082-229-0822

E-mail: zenshoji@hicat.ne.jp

ホームページ http://zenshoji.org/

改歳之令辰

平素のご厚誼に感謝し、
皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

四弘誓願文（四つの大きな誓いと願い）

衆生無辺誓願度

（命あるものはかぎりなく存在するが、その救済を誓い願います）

煩惱無尽誓願断

（煩惱は尽きることなくうまれてくるが、それを断つことを誓い願います）

法門無量誓願学

（お釈迦様の御教えははかりしれないが、それを学ぶことを誓い願います）

仏道無上誓願成

（お釈迦様の道にこの上はないが、成仏することを誓い願います）

菩薩の誓願

前述の四弘誓願文は、ご法事などの読経の最後に私がいつも唱えている偈文です。これは、すべての菩薩が普遍的に追求すべき誓願とされていますが、菩薩っていったい何でしょう？

お釈迦様が無くなった後、百年もすると出家者が中心となって、お釈迦様の御教えが経典としてまとめられるようになります。しかし、年代と共にその量が増え、出家者は経典の学問的解説や自分が解脱する為の修行に専念するようになります。一般社会や在家信者との関わりをあまりもたなくなっていくます。そうした出家僧団が分裂を重ね、最終的には二十ぐらいの部派ができたそうです。これを部派仏教といいます。この部派仏教の人たちは、自分たちはお釈迦様のように仏にはなれないと考えていたので、菩薩とはお悟りをひらかれる前のお釈迦様のことをいっていました。しかし、そうした部派仏教に対して多くの在家信者は疑問を抱

くようになっていきます。本来お釈迦様は、苦しみ悩む人々が救われ安らぎを得るためには、どうするべきかを説かれていたはずなのに、なんだかおかしいぞという在家の人たちが中心となって新しい流れができていきます。これを大乘仏教といえます。この大乘仏教がヒマラヤを越え中国に伝えられ、日本へと伝わってきたのです。

このインドにおける大乘仏教の人たちは、自分たちと同じ人間のお釈迦様が仏に成れたのだから、煩惱の尽きることない自分たちでもお釈迦様と同じ修行をしていけば、将来仏に成ることができると考えました。そして、その修行を行い成仏の道を求める人はみな菩薩だということになったわけです。

ここでいう修行とは、お釈迦様が菩薩であるときに修行されたという六波羅蜜の修行のことなのですが、六波羅蜜の修行については、「菩薩の修行」と題して次号でお話しします。

言葉の意味として菩薩とは、ボーディ・サットヴァ Bodhisattva というサンスクリット語を漢字に音写したもので、ボーディは「目覚め」、サットヴァは「心や感情をもった存在」ということで、人間を意味します。つまり菩薩とは「目覚めた人」という意味になります。

我々が普段の生活の中で、親からいただいた名前と呼ばれている自分が、確固不動の自分と思ひこんでいますが、その自分は実は状況や環境により移り変わりますし、世の中すべてのものが、常に移り変わり、確実な不動の存在ではありません。そういう現実を目覚めた人ということです。その菩薩の誓願が、四弘誓願文（四つの大きな誓いと願い）なのです。

我々が受け継いでいる日本の仏教は、この大乘仏教であり、もとは在家の方々運動により興ったものです。いま日本は未曾有の災害に見舞われ、これまで確固不動と思われた生活が崩れ去ってしまいました。絶対安全の原爆も不動に安全なものではありませんでした。まるで夢や幻を見ているようですが、これが真実であり確固不動と思っている我々が実は夢の中で生きているようなものなのです。今こそ我々は目を覚まし、成仏道を求めるべきではないでしょうか。皆さんも道を求める心を起こせば、菩薩なのです。



光と伝えた人々

南泉斬猫

愛知専門尼僧堂堂長 青山俊董老師

南泉一日、東西の両堂、猫児を争う。南泉見て遂に提起して云く、道い得ば即ち斬らじ、衆対うる無し。泉、猫児を斬却して兩段と為す、泉、復た前話を挙して趙州に問う州便ち草鞋を脱して頭上に戴いて出づ。泉云く、子若し在らば恰も猫児を救い得ん。

逃げ場なしに追いこむ

禅画の格好の題材として登場する図柄に、「南泉斬猫の話」がある。片手に猫の首根つ子をつかまえてぶらさげ、片手に刀を持ち、すさまじい形相で猫を斬り捨てようとしている南泉和尚と、その氣迫におじけづいて尻ごみする雲水たちの姿、その中であって一人飄然と草鞋を頭にのせて去つてゆく趙州の姿を描いたものである。南泉普願和尚は、百丈和尚と共に馬祖道一の弟子であったが、年齢は百丈より一歳年上で、しかも百丈より二十年も長く生き、八十六歳で世を去った。俗姓が王であったので、王老師とも呼ばれている。

ある日、南泉の会下の雲水たちが一匹

の猫を真名において言い争っている。「猫に仏性があるか、ないか」というのである。たまたま堂頭の南泉和尚が通りかかったのである。その猫をつかまえて、片手に利刀をかまえ、雲水たちをにらみつけて叫んだ。「ちと、ましなことをいうことができたなら、猫を斬らないでおこう」と。しかし和尚の氣迫に押されて誰も一言もいうことができず、あわれ猫はまっぴらつに斬り捨てられてしまった……。

そこへ弟子の一人の趙州がやってきたので南泉が、「お前なら何という？」と問うたところ、趙州は何もいわず履いていた草鞋を頭にのせて出ていった。南泉は溜息をつきながら「お前がもう少し早くこの場にいたら、猫は殺されずにすんだのにな」といった。南泉の禅風の特徴は「異類中行」といつて人間ばかりではない、犬・猫や牛・馬などの世界から、地獄、餓鬼などの世界に到るまで、自ら進んで出かけ、救済しようというところにあるという。その慈悲の南泉が、猫の命を賭けてまでも雲水を説得しようと、ぎりぎりの作略を行う。しかし猫の命は救けてやりたかったのである。「ましなことをいうことができたなら切らない。さあ早くいえ」とつめよるが、誰も何ともいえない。私かときどき掛ける軸に、山田無文老師の書になる一幅で、「道い得るも三十棒、道い得ざるも三十棒」（徳山の言葉）というのがある。禅の語録で「道」という文字が出て来たら、「みち」という意味に使うときと、「言う」という文字と同じ意味に扱うときと二通りある。この場合も「言う」の意味に使っている。つまり「まし

なことをいうことができて、あるいはいうことができなくても、三十棒をくらわすぞ」というのである。逃げ場なしである。禅門で師家が修行僧を説得するときは、このように逃げ場なしに追いこむのが普通である。

道元禪師も『正法眼蔵随聞記』の中で、「我もし南泉なりせば、すなわちいへし。云い得たりともすなわち斬却せん。云い得ずともすなわち斬却せん」といい、さらに

「大衆に代つて云わん。和尚ただ一刀兩段を知つて、一刀一段を知らず」という言葉を添えておられる。一刀兩

段というのは、一刀のもとに二つに斬り捨てることであり、一刀一段というのは斬らない、つまり殺さない、ということである。

南泉は、雲水たちを逃げ場なしに追いこむことぐらい先刻承知であつたろう。「背水の陣」という言葉がある。人間、ぎりぎりのところに追いこまれないとなかなか本気になれない。本気にならなかつたら人生の真実をつかむこともできないから。死刑囚や癌の宣告を受けた人の言葉は傾聴に価するように。

そういう逃げ場なしの状態に、作爲的に追いこむ、これが師家の学人を説得する手段である。しかしその為には猫を犠牲にはしたくなつたのである。南泉は一縷の逃げ場を残してやったのだが……。

心を鬼にして一匹の猫の命を犠牲にしてまでも、南泉は何を雲水たちに語ろうとしていたのだろうか。



猫の目に人間はどう映るか

——「異中来也かえって明監」——

五月中旬八日ほど訪米した折、ナイアガラ瀑布を訪ねた。エリー湖から流れ出した水がゴート島で二分され、一方は越境してカナダ瀑布となり、一方はアメリカ瀑布となった。二つの瀑布は一つの視界の中におさまる距離にあり、滝壺に落ちた水はたちまち合流して一つのナイアガラ川となる。

二つの瀑布ともにナイロンのカッパが支給され、それぞれ全身を包みながら、一方は滝の裾近くを歩いて巡り、一方は船で巡遊する。アメリカ瀑布は幅が三百メートル、カナダ瀑布は馬蹄型に湾曲しながら七百メートルに及び、そこを五十メートル余りの高さからなだれ落ちるのだから、まきおこす風圧と飛沫のものすごさは想像を絶するものがある。

まるで暴風雨のなかを必死でくぐり抜

ける思いで、滝をおおぎ見るゆとりなどあるならばこそ、目もあけられない思いで、ぬれた階段に足をとられないように歩くのが精一杯。やつとの思いで山裾の平坦な道にたどりつき、初めて瀑布の全貌を眺めながら、「ああ、あそこを歩いてきたのね」と語りあったことである。

カッパも脱ぎ、ぬれた足もとも取りかえ、対岸の休憩所から眺める瀑布の景観はまたひとしお。カナダの滝もアメリカの滝も、その下を必死で巡る人も船も、遠くから眺めれば一幅の絵として美しく、また見ごたえもある。ふと澤木興道老師の「坐禅とは見渡しのきく高い山へ登るようなものだ」とおっしゃった言葉が脳裏をよぎった。

瀑布の只中ただなかにいたらそこをくぐり抜けることだけで精一杯。周囲を見わたすゆとりなどなく、瀑布も自分の姿も見えやしない。瀑布も、その中の自分の姿も、つきはなして眺めて始めて、全体の姿が見える。そのように、自分の人生も、そこに埋没しているだけでは、幸不幸を追ったり逃げたり、その中で七転八倒しちてんぱつとうしている自分の姿は見えない。その只中ただなかにあつてあえぎつつも、それをつきはなして静かに眺めるもう一人の私の眼が育たない、今の一歩の踏み出しをあやまりないものとして踏み出すことはできない。滝の外へ出なければ滝の全体の姿を見ることができないように、人生の外に出なければ自分の人生のほんとうの展望はできない。

人生の外へ出るとはどういうことか。そこでまた内山興正老師の言葉に思い

到った。
「床の間に棺桶かんばんけを置き、のぼせあがつたり出口がわからなくなったとき、その棺桶の中へ入り、そこから人生をふり返って見よ」

「棺桶の中から人生を見渡せ」ということは、自分を死にきらせ自分の人生の外から自分の人生を見渡す、もう一人の私のたしかな眼を育てよ、ということである。瀑布の場合にたとえるなら、瀑布の下を何も見えず、考えるゆとりもなく、あえぎながら通り抜けることだけで生命がけという自分を遠くつきはなし（死にきらせ）、対岸で静かに展望しているもう一人の私があつて、今この一歩を、たしかなものとして踏み出すことができるというのである。

この「南泉斬猫」の話より学ばねばならないことは、頌しょうの中の一句「異中来也還つて明監」の一句に象徴する心ではなからうか。「人間の世界の外から見ているから人間のことがよくわかる」というのである。私はときどき猫を抱きながら「猫の眼に人間のやつていることはどう映るのだらう」と思うことがある。

一つのことに関して立場を異にする一方は是といい、一方は非といい、あるいは損をした得をしたなど、人間の分別、モノサシを絶対に信じて疑わずにふりまわし、その価値観にしばらく動きがとれなくしているが、その分別の一切を一度斬り捨て（死にきらせ）、遠くから、別の視点から展望して見よ、全く別のひるやかな世界が見えてこよう、の呼びかけが、この則の眼目ではなからうか。

行願の実践

東堂 横山正賢

修証義第四章

発願利生 第二十節

若し菩提心を発こして後、六趣四生に輪転すと雖も、其の輪転の因縁皆菩提の行願となるなり、然れば従来の光陰は設ひ空しく過ごすといつても、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて発願すべし、設ひ佛に成るべき功德熟して円満すべしといつても、尚ほ廻らして衆生の成仏得道に回向するなり、或いは無量劫行ひて衆生を先に度して自からは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。

大本山永平寺第七十四世貫首故佐藤泰舜禪師は、此の第二十節は、「菩提心という心の芽は、一度芽生えると、永久に枯れないで伸びてゆくことを示されたもので、真実の宗教心の発芽は不退転の信念と実行とを伴う強い力のあることを述べたものである。」とご著書の中で申しておられます。

菩提の行願と言うのは、救済という他に尽くすという願いと、その実践修行を言うのです。身をもって行う行為と、心に思う願いの実践に生きることを言うのです。

この菩提心の芽は人間誰でも授かっているものであると言われるのであります。ただ之が私たちの営みにおいて発芽するかどうかと言うことです。

しかし一度菩提心の行願に目覚めたならば、「六趣四生に輪転すと雖も、其の輪転の因縁皆菩提の行願となるなり」六趣というのは六道と同じ意味で地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上と言ひ、人間の葛藤しながら生きる様を言うのであります。

東日本大震災に遭遇する地獄・名譽や地位や物欲に執着し人を騙してでも自己の欲望を追い求める餓鬼・自己の欲望を満たすために人を犯し殺めたりする畜生・嫉妬、妬み、など喜怒哀楽する感情の激しく動く様が修羅・このように喜怒哀楽に生きるそのものが人間・然し人間であればこそ、其の苦しみを愁い悲しみ後悔し反省する事が出来る事が人間であり、その人間の愁いを超越した理想郷が天上なのであります。

四生と言うのは、生物の地球上に生まれ出る生まれかたを言うのです。

人間を始め動物の生まれかたを胎生、鳥や爬虫類など卵から生まれる卵生、苔とかカビ、蚊とかハエなど湿気の多い処から生まれる湿生、幽霊や亡霊のことを

化生と言ひます。

幽霊とか亡霊というのがあるかと言われますと、そのようなものに出会ったことの無い私は肯定も否定も出来ませんが、それが有ると信じられていた時代の教えが今に伝わっているわけです。

大事なことは、私たちがいろいろな生命の生まれかたがある中で、この世に人間として生命を授かっているという不思議を感じるべきでありましょう。

その命が生まれ変わり死に変わりしていく因縁の中で菩提心に目覚めたということは、行願と言う人類を始め森羅万象が平等の願いを、行動として実践することであります。

過去はたとえ空しく過ごしてきたかも知れないが、「今生の未だ過ぎざるあいだに急ぎて発願すべし」と申されるように、東日本大震災に遭遇して過去の蓄積してきた地位や名譽、財産の全てを失って嘆き悲しむ、出会った不幸を恨みに思うことなく、今日の現実に目覚めて生きる願いを發こし行動することです。

菩提心に目覚めた生き方というのは、苦しみに会おうが楽に会おうが、己を空しゅうして自分のため、人のためという分別をやめて、今なすべき事を素直に営むということでしょう。

平たく言えば他人の喜ぶ姿を見て我が喜びとする。他人の愁う姿を見れば、我が愁いと受けとめて共に悲しみ、平安な社会の実現を祈る生き方を教示されているのであります。

◆道心・趣味の会◆

諸行無常

「諸行無常」と、云う句は、日本人なら誰でも知っているであろう。

それは、たとえば『平家物語』の冒頭に、

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理りを現す

と、あるように、今でも学校時代に耳にしていること、そして、何より身近なところで「生者必滅・会者定離」と、いうことも、誰しも経験し、世の中の無常ということが実感としてわかるからである。

ただし、その場合、諸行とは何かということには、あまり気に留めていないのがおおかたである。

諸行無常を説く大事なうたとして、仏典には、次の詩偈がある。

諸行無常（修行は無常なり）

是生滅法（是れ消滅の法なり）

生滅滅已（生滅滅し己れば）

寂滅為楽（寂滅もつて楽となす）

この意味を説明する代わりに、同じ内容を表す日本の歌を、挙げてみると、

いろはにほへど ちりぬるを
わがよたれぞ つねならむ
ういのおくやま けふこえて
あさきゆめみじ ゑひもせず

解釈は―

桜の花は、今も盛りと咲き出ているが、やがて散ってしまう。それと同じで、この世に、誰が常に変わらずありつづける者があるうか。

この有為の奥山を、今日こそそのり越えて、彼方の理想の世界に行こう、そこでは、もはや、浅はかな夢を見ることもなく、酔いしれることもない。

この「いろは歌」を、介して、諸行無常の意味を探ると、

「この世のものはすべて無常である」ということ。である。

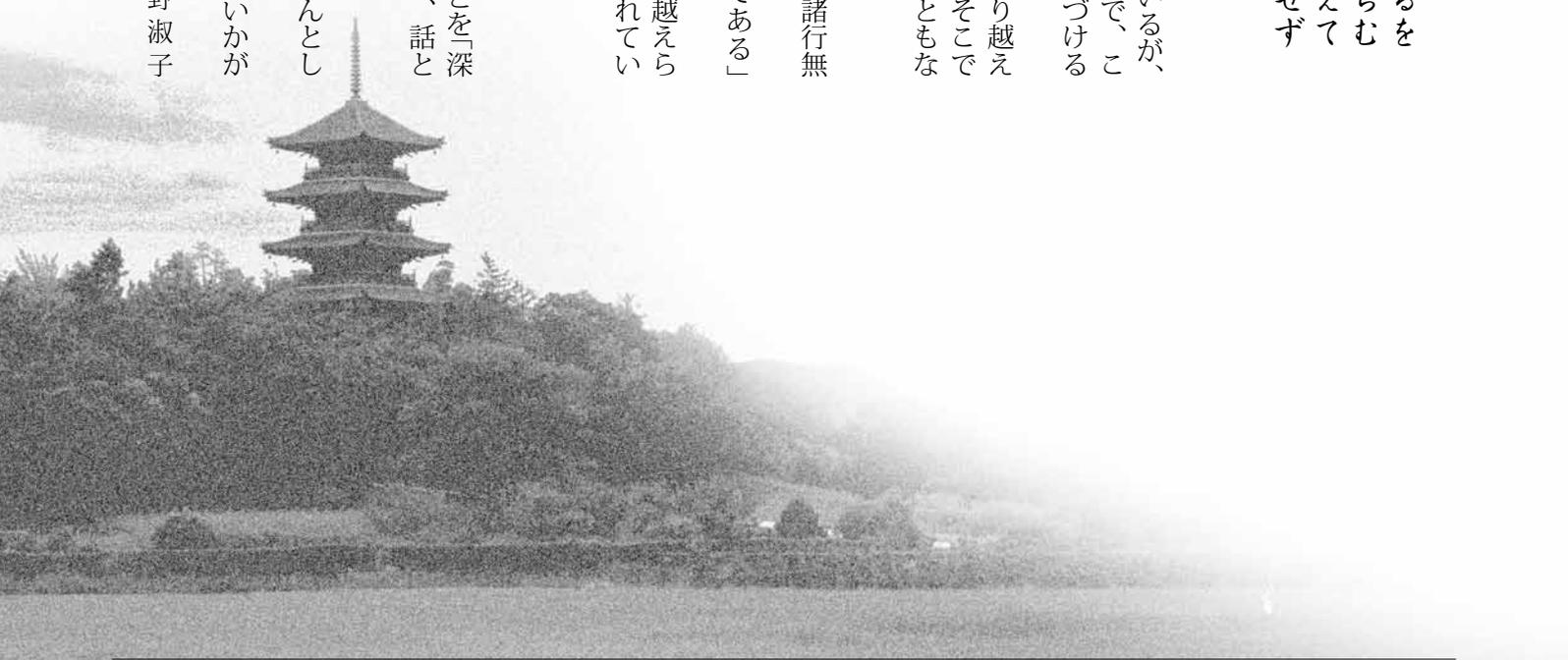
そして、その同じものが、乗り越えられるべき「有為の奥山」と、呼ばれていることが知られる。

有為の奥山を、字引で引く―

無常の浮き世に、迷い執着することを「深山の越えがたい」のに、たとえた、話となっています。

*日本古来の云い伝えには、ちゃんとした理由がありますねー。
このように理解していますが、いかがでしょうか。

矢野淑子



◆行事報告◆ (七月〜十二月)

●お盆前諸堂大掃除

七月二十四日(日) 午前十時より
三十四名のご奉仕により一時間半程
で終わりました。ご奉仕の皆様お疲
れ様でした。

●五蘭盆会法要

八月六日(土) 午前十時半より
例年同様の参拝者で賑わった。

●青山俊董老師講演会

九月三十日(金)
六十名ほどの参加者があり、老師
の爽やかなお話で、皆が法悦に浸つ
た。

●お月見コンサート

十月八日(土) 午後十八時半より
今年は、大代啓二先生のお力添えで
再びファゴットの岡崎耕治さんをお
迎えることが出来ました。ベー
トベンや赤とんぼなど、親しみ深
い曲に、三百名を超える参加者は心
を和ませました。入場料から必要経
費を引いた六万二千二百五十三円を
福島復興プロジェクト「花に願いを」
にご寄付しました。

●第四回 西国三十三観音霊場巡り

十一月九日(水)〜十一日(金)
第三十三番華嚴寺(岐阜県)から長
野県善光寺を巡拝し、参加者二十二

名は無事西国三十三観音霊場巡拝を
終えました。



西国三十三番霊場「華嚴寺」を参拝

●臘八撰心坐禅会

十二月一日(木)〜八日(木)
少人数の参加者でしたが、無事につ
とまりました。

◆行事案内◆ (二月〜四月)

●年頭坐禅会

正月元旦 午前八時より

●新年修正会(大般若祈祷会)

正月元旦 午前十時より

ご家族で初詣としてご参加下さい。
新しいご祈祷札をお配りしますの
で、古いお札を持参してください。

暖かいお飲物を準備してお待ちし
ております。

●涅槃会法要

二月十五日(水) 午前十時半より
広島第一教区の和尚様によるお釈
迦様お涅槃の法要が行われます。
大勢のご来山をお待ちしておりま
す。

●青山俊董老師講演会

二月二十八日(火)
正法眼蔵現成公案の御提唱
午前の部 十時半〜十二時
午後の部 十三時半〜三時
参加費 午前午後 各千円
昼食代 一人 百円

*坐禅をされる方は九時より

*昼食を希望される方は、予め電話
にてお申し込み下さい。

●彼岸会法要・護持会総会

三月十七日(土) 午前十時半より

お彼岸会法要に引き続き護持会総
会を行います。お昼のお弁当を準
備してお待ちしております。また、
今年は広島太鼓友の会による和太
鼓をご紹介いたしますので、ご家
族お揃いでご参加下さい。

●伊藤優さんピアノコンサート

四月二十一日 土曜日

*詳しくは後日発表いたします。

毎月定例行事

●上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第四金曜日午後一時から
※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつ
もりでご参加下さい。

●御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招
いて練習 昼まで

◎茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講
師の都合により変更する場合もあ
ります。初めて参加される方は、
電話にてご確認下さい。

毎週定例行事

●暁天坐禅会 月曜日〜金曜日

毎朝午前五時半〜六時十分まで

●水曜坐禅会 午後七時より

坐禅・茶話会 終了八時半

●婦人坐禅会 毎週金曜日

午後一時より坐禅・茶話会(終)三時
(第一金曜日のみ坐禅の後、写経・
茶話会)

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、
趣味の短歌俳句など何でも結構
です。お寄せ下さい。